

論文

季語にみられる色彩語の用法

Color terms in *kigo* or season words in *haiku*

小松 史枝 Fumie Komatsu

女子美術大学大学院 Graduate School of Joshibi University of Art and Design

近江源太郎 Gentarow Ohmi

女子美術大学大学院 Graduate School of Joshibi University of Art and Design

Abstract

We analyzed the uses of color term in *kigo* or season words in *haiku*. It is the practice to include a *kigo* in *haiku*. *Haiku* is one of the form of the Japanese traditional poetry, and spread widely today. Therefore, through the uses of color term included in season words, we can understand characteristics of Japanese traditional color terms succeeded today.

As a result, about 12.7% of *kigos* included color terms in a wide sense and 90 kinds of color terms were used. Red, yellow-green, vivid colors, pale colors and dull colors appeared frequently, and blue-green, red-purple appeared rarely. From the stand point of basic color term theory, primary categories were used frequently and derived categories were used rarely. The fact that about 70% of "ao (blue)" indicated green shows, "grue" exist firmly in the traditional and the modern Japanese. Although "cha (brown)" "orenji (orange)" used frequently, they did not indicated those color. Then, at least concerning *kigo*, words corresponds to brown and orange were used unfrequently.

Keywords : *kigo* or season words, basic color term, traditional color names

要 旨

俳句の季語約17000語について、色彩語の用いられ方を分析した。俳句は日本の伝統的な詩歌の形式であるが、今日も広く普及している。したがって、季語に含まれる色彩語の用法をとおして、現代にも継承されている伝統的な日本語における色彩語の特徴を知り得る、と考えたからである。季語のうち、広義の色彩語を含むものは約12.7%にのぼる。しかし、色を直接指示するとみられるものは約0.3%であった。また、季節別では夏に多く、冬や新年には少ない。部類別では、植物が多く、時候に少ない。色彩語の種類は90語であったが、そのうち色相別ではred、yellow greenが多く、blue green、red purpleが少ない。トーン別では、あざやかなトーン、うすいトーン、およびくすんだトーンの3系統に集約される。また、Kay & McDanielの基本色彩語理論にあてはめると、次のような特徴が指摘できる。根源色カテゴリが多く、派生色カテゴリは少ない。ただし、前者のうち「青」の約70%がgreenを指しており、grueの存在は季語においても確認された。また、派生色カテゴリのうち、brownに相当する「茶」はかなり出現するけれども飲料としての茶にかかわって用いられており、orangeに相当する「橙」も同様に果実を指示したもののみである。したがって、この2語はBerlin & Kayの基本色彩語基準のひとつである「使用頻度が高く一般的」には該当しないといえる。

キーワード：季語、基本色彩語、伝統色名

1. はじめに

本報では、俳句の季語にみられる色彩語を統計的に整理して、その特徴を主として基本色彩語の視点から考察する。

古代日本語における色名について、佐竹¹⁾は赤・黒・白・青の4語があるのみで、しかもそれらは「色彩なのではなく、明・暗・顕・漠という光の二系列であるに過ぎない」と述べている。また、前田²⁾は『古事記』に用いられている色名について、およそ次のように結論づけている。同書には色名と推定し得る語が65回用いられているが、種類は丹・赭・黄・緑・青・翠・白・黒の8語である。また、そのうちで「流通性のあったのは赤・丹・青・白・黒の5語で、中間色を表す名詞は一語もない」。他の諸言語と同様に、古代日本語における色名はごく限られた数であった。

しかし、これもまた世界の諸言語と同様、時代とともに色彩を表現する語彙は増加し続ける。その状況は、『萬葉集』以来、平安、室町に至る歌集に用いられている色彩を表現する語を、収集・整理した伊原³⁾の研究などから知ることができる。今日では、たとえば日本工業規格(JIS Z 8102-2001)⁴⁾に収録されている慣用色名は269語であり、比較的広く普及している色名辞典でも収録色名数は数百語に及ぶ。

近代日本の詩歌における色彩語を定量的に分析し始めたのは、文章心理学であろう。波多野⁵⁾を先駆けとし、木村⁶⁾、コバヤシ⁷⁾、安本⁸⁾らの報告は広く知られている。こうした研究の多くでは、文体の特徴を知るためのひとつの指標として、さらに作品鑑賞の手がかりとして色彩語をとりあげている。

俳句は和歌と並んで日本における代表的短詩型文学であり、今日一般に広く定着している。そして、俳句には季語を含めることが原則とされてきた。季語は、次のように説明されている。⁹⁾

「連歌・連句・俳句で、句の季節を示すためによみこむように特に定められた語。例えば、鶯は春の季語、金魚は夏の季語。季の詞。季題。」

また、時代に応じてある程度の追加はあるものの、比較的伝統を尊重して精選、かつ定式化されている。したがって、季語に含まれる色彩語をとおして現代にも生きている、日本語の伝統的色彩語の特徴を理解できると考えた。

本論文は、次の2つの目的をもっている。

第1は季語における色彩語の使用実態を、網羅的かつ計量的にとらえることである。従来、この種の論考

では主観的あるいはエピソード的な記述が中心であった。したがって本論文では、まず事実を客観的に確認したうえで、カラー・オーダー・システム特に系統色名分類からその特徴を明らかにする。

第2は、その傾向を基本色彩語理論と照合して、季語ひいては伝統的な日本語における色彩語の用法の特徴を明らかにすることである。基本色彩語は、世界の諸言語に共通する普遍性をもつとの認識が有力である。したがって、これと比較することによって、季語にみられる特殊性を相対的に確認し得ると考えた。

2. 方法

色彩語を含む季語を抽出して、計量的にその特徴を確認した。

2.1 資料

対象とした資料は、水原秋桜子・加藤楸邨・山本健吉監修『日本大歳時記』(講談社1983)¹⁾である。同書には、季語・季語解説・近世以降の例句が収められている。収録季語数は、17263語であり、これが本研究における対象季語の母数となる。また、季節が春・夏・秋・冬・新年の五季に、部類が時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物の七部類に区分されており、これらも集計の指標とした。

同書を選んだ理由は、収録季語数が最も多い歳時記のひとつであり、季語の全体像を推測するに十分であろうとみられること、特定の結社に偏っていないこと、例句・季語解説が充実しており、分析に便利であることなどである。

2.2 “色彩語を含む季語”の基準

次の基準によって、対象季語を抽出した。

- 1) JIS Z 8102:2004「物体色の色名」には慣用色名として日本の伝統的な色名269語が「色名1」として収録されている。まず、これらを選出した。
- 2) JIS慣用色名の多くには、朱色・紅色・空色・草色などと「色」の文字が付されている。しかし、このうちたとえば朱色や紅色は、通常の用法として「色」を除いた朱・紅のみで色を指示する例と、空色や草色のように「色」を除くと色から遊離してしまう例とがある。
- 2-1) そのうち、前者のようにJIS慣用色名から「色」の文字を除いてもなお色を指示する語を色彩語として抽出した。ただ、この基準はやや恣意的な面があるので、例句を参照して判定をした。該当語種類数は14語であった。

2-2) 次に、両者を含めて、つまり「空」や「草」のように「色」を除くと色としての意味が希薄になるものも一応採録した。

3) JIS慣用色名には収録されていないけれども、色名辞典¹²⁾にとりあげられており、色彩語とみなし得る語も選出した。たとえば、翠・蒼など。

4) 上記以外に、「五色の糸」「紫蘇の色」などと「色」の文字が付された7語も一応色彩語に加えた。

以上1)～4)を併せて得られた90種類の語彙を、色彩語とみなして、以下の分析を行う。

3. 結果

3.1 分布の特徴

(1) 季語の中での比率

色彩語を含む季語は合計2186語であり、季語総数の12.7%にあたる。

(2) 季節別の比率

色彩語を含む季語がいずれの季節に多く出現するかをみると、夏の39%が最も多く、春・秋が20%台、そして冬と新年とは10%を切っている。しかし、各季に該当する季語の数は季節によって異なり、夏が多く冬は少ない。そこで、季節ごとに色彩語を含む季語の比率を求めると、表1のように夏が最も多く18%、以下春、秋と続き、冬が6%、新年の3%が最低である。ちなみに、各季節の上位3位までをあげると、春は桜・白・茶、夏は青・水・白、秋は紅・柿・白、冬は白・青・黒、新年は白・茶・黒であった。

(3) 部類別の比率

色彩語を含む季語がいずれの部類に多く出現するかをみると、表2のように植物が最も多く約55%を占める。以下、生活16%、動物14%と続き、天文、地理…そして時候の2%が最も少ない。しかし、部類によって該当する季語数が異なるので、部類ごとに色彩語を含む季語の比率を求めると、植物の28%が最高で、以下地理の16%、動物の12%と続き、時候の3%が最も少ない。

表1 色彩語を含む季語の季節別分布

	春	夏	秋	冬	新年	計
季語数 (a)	3850	4884	3751	3190	1588	17263
色彩語を含む季語数 (b)	567	865	506	195	53	2186
季節内比率 (b/a %)	14.7	17.7	13.5	6.1	3.3	—
季節間比率 (%)	25.9	39.6	23.1	8.9	2.4	100.0

3.2 色系統別の特徴

JISでは、慣用色名の他に系統色名法による色の分類・表示方法を採用している。そこで、季語に用いられている色彩語の全体像を知るために、系統色名分類における分布の特徴を示すかをみた。系統色名分類の適用にあたっては、上記「色彩語を含む季語の基準」1)および2)についてはJISの付表1に示された「対応する系統色名」によった。また、基準3)に相当する色彩語については、色名辞典などによって可能な限りマンセル値を求め、その結果にしたがって系統色名に分類した。その操作が不可能な、つまり指示する色が不確かな色彩語は、以下の分析から除外した。したがって、1964語が分析対象となる。

3.2.1 色相による分類

JIS系統色名では、有彩色については「基本色名」として10分類、無彩色についても「基本色名」として3分類を示しているの、これにしたがった。

結果は、図1のとおりであり、R系、GY系およびB系がいずれも18%以上で突出している。三者を合わせると54%を占める。出現率の低い色は、BG系、RP系、G系、V系などであり、概して中間色相は低率であった。季節別にみると、春ではR系・GY系・N系、夏ではB系・GY系・R系、秋ではR系・GY系・B系、冬はN系・B系・R系、新年ではN系・O系・R系が、それぞれ上位を占める。R系は、いずれの季節でも多用されるが、ほかに突出する色は、新年のO系、夏のGY系・B系、新年および冬のN系などである。また部類別にみると、地理のB系(青き嶺、青田風、青富士等)、生活のB系(催青、藍浴衣、紺足袋等)、動物のN系(紋白蝶、灰色雁、黒蟻等)、植物のB系・G系(青梅、草青む、新緑等)・R系(赤蕪、紅椿、桃色水仙等)などが注目される。数値は付表1

表2 色彩語を含む季語の部類別分布

	時候	天文	地理	生活	行事	動物	植物	計
季語数 (a)	1116	1106	497	4501	3144	2617	4282	17263
色彩語を含む季語数 (b)	30	52	81	350	166	299	1208	2186
部数内比率 (b/a %)	2.7	4.7	16.3	7.8	5.3	11.4	28.2	—
部類間比率 (%)	1.4	2.4	3.7	16.0	7.6	13.7	55.3	100.0

に示した。

3.2.2 トーンによる分類

JIS系統色名では、「有彩色の明度及び彩度に関する修飾語」13語、「無彩色の明度に関する修飾語」3語を規定し、これらの相互関係をマンセル色立体上で図示している。以下、その分類を便宜的にトーンと呼ぶこととする。季語に用いられている色彩語をトーンにしたがって分類すると、図2のようになる。

1位はvv (あざやかな) の25%であり、突出している。以下、2位dl (くすんだ) の18%、3位はN (無彩色) の12%、4位はpl (うすい) の10%であり、これらの出現率が際立って多い。なお、vp (ごくうすい) の5%とplとを合すると、うすい系統のトーンが15%となる。したがって、大まかには季語に用いられている色彩語のトーンは、次の4系統で約70%を占めることになる。①あざやかな色、②うすい色、③くすんだ色、④無彩色。

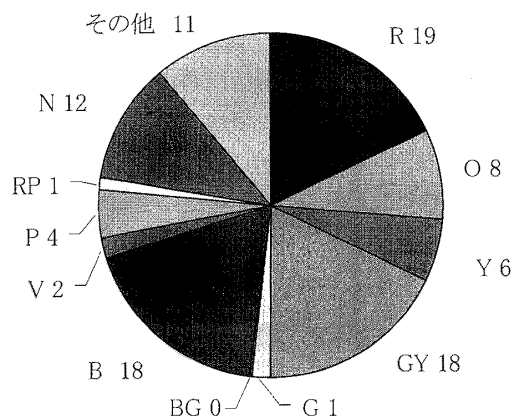


図1 色彩語を含む季語の色相分布 数値は%

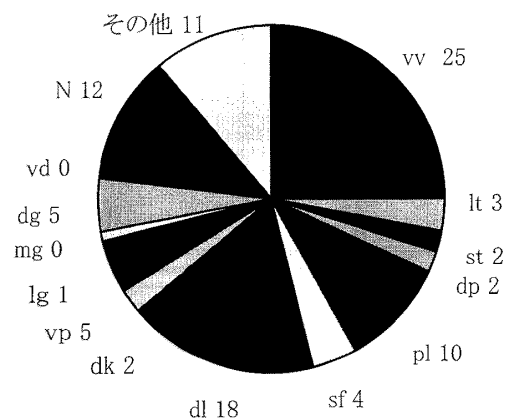


図2 色彩語を含む季語のトーン分布 数値は%

これを季節別にみると、次のような特徴がうかがえる。春には他季に比べてvpが多い。夏ではvvとdlとに集中し、ほぼ3分の2を占めており、夏はトーンの偏りが大きい季節といえる。秋は多様なトーンに分布するが、vvおよびdlが比較的多い。冬はvvとNが多く、dlが少ない。新年はNの43%が突出し、dkGy (色みを帯びた暗い灰色) が他季にくらべて多く、新年は色みの乏しい季節とみられる。

また、部類別の特徴としては、次の点があげられる。生活はvv、pl、dl、dg、Nが比較的多いけれども、むしろ多様なトーンに彩られた部類といえる。逆に地理ではplが53%で1位、これにvvを加えると70%を占めており、最も単調である。植物ではvvとdlとで50%を超える。行事ではvv・pl・Nで、また動物ではvv・dl・Nで、それぞれ60%を超える。

3.3 色彩語の種類

以上では、色彩語を含む季語が、どのような分布を示すかを頻度を手がかりに整理した。次には、どのような種類の色彩語が用いられているか、その特徴をみる。

表3に、具体的な色彩語の出現頻度の上位を示した。これらを、JIS系統色名の区分にしたがって、色相別に整理すると、特にR系・Y系・B系などで、さまざまな種類の色彩語が用いられている。つまり季語において語彙が分化している色領域といえよう。ただし、JISにおける収録語数は、色相によって異なり、O系・R系・B系などは相対的に多くの色名が収録されている。したがって、季ごとにJISの収録語数との比で色彩語の頻度をみると、Y系では、JIS収録語のうち

表3 季語にみられる出現頻度上位の色彩語

	色彩語(出現頻度)	種類数(a)	JIS数(b)	a/b
R	紅(111)桜(105)赤(55)桃(51)...	15	23	56.2
O	茶(65)柿(45)栗(40)杏(8)蜜柑(8)...	9	25	36
Y	黄(61)土(14)山吹(11)砂(11)...	12	17	70.6
YG	草(325)鶯(25)若葉(14)松葉(9)...	8	12	66.7
G	緑(24)常磐(5)若竹(1)青磁(1)	4	9	44.4
BG	鉄(8)	1	5	20
B	水(208)青(140)藍(22)瑠璃(10)...	11	22	50
V	藤(20)菫(20)桔梗(4)	3	8	37
P	紫(45)菖蒲(25)菖蒲(24)	3	7	42.9
RP	牡丹(24)	1	2	50
N	白(172)黒(66)鼠(5)灰(4)...	6	15	51.5
その他	金(84)葵(37)色(36)銀(33)錦(24)	9	—	—
計		82	145	

71%の色名が季語に用いられており、ついでYG系の67%、R系の65%、B系の50%が上位となる。また、JISの色相別収録語数が著しく少ない色相もあるから、単純に比率のみで比較するわけにはゆかないが、BG系・O系・V系など中間色相系の色名はJIS慣用色名の数に比べれば、季語に使用される色彩語の比率がさらに低い傾向がうかがえる。

3.4 色彩語と色彩との関係

文学作品に用いられる色彩語のうちには、直接特定の色を指示している語ばかりでなく、知覚される色との関係が希薄な語もある。たとえば、青空はblueの範疇であろうが、青芝や青葉はgreenに入ろう。また、青春は五行五色まで遡れば、ある程度色と結合するかも知れないが、むしろ色から抽象化された、あるいは象徴的な概念であろう。青頓忌は冬の季語であるけれども、blueとも冬とも必然的な関係は読みとりにくい。紅色は紅の1字で色を指示して用いられる例が多い。そのうち、紅牡丹や紅梅などは色を識別した例といえるが、紅葉狩となると、紅葉が語彙として定着しているうえに、紅葉狩という行為のほうに主眼がある。季語においても当然、一般的意味論つまり“ことばと事実との関係word-fact relation”の視点は避けられない。

表4 色彩語と色との関係の種類

色との関係の区分		種類数※	頻度数
色を指示することが第一義の語		23	490
対象の色属性	対象をそれに付随する色で表現	31	208
	対象の名称として定着	73	986
抽象化された表現		17	76
その他・不明		25	456
計		169	2186

※同一色彩語でありながら、複数の区分に該当するケースがある。

表6 「青」の指示内容

内容	例	種類数
blue	青鮫, 青摺りの衣, 冬青空…	13
green	青麦, 青柳, 草青む, 青梅…	107
抽象化された表現	青梅雨, 催青, 青東風, 青女…	11
その他・不明	青頓忌, 青葉潮, 青水無月…	9

3.4.1 色を指示する色彩語

ある程度恣意的になることは止むを得ないが、資料とした歳時記の季語解説や例句を手がかりに、色との関係を表4のように分類した。狭義に、すなわち色を指示することが第一義の色彩語を拾うと季語のうち490語にすぎない。しかし、対象物の1属性である色によって対象の名称が成立している語も、200語程度は認められる。さらに、青春のように抽象化された表現とみなせる語は約80語と考えられる。残る456語は色との結合関係が一層希薄とみるべきであろう。

色を直接指示するとみられる語のみについて、色相別に分類すると表5のようになる。R系、B系およびN系が中心となっている。他に、赤・黄・緑・青・紫・白・灰・黒などの基本色彩語は含まれている。

3.4.2 grue

greenとblueとを同じ語によって表わす例は、世界の諸言語に多くみられる。季語においても、青草・青梅など「青」によってgreenを指す例が多い。種類数でみると、表6のように分類され、「青」の付された季語のうちわずかに約6%のみがblueを指すと推測される。

表5 色を直接指示することが第一義の語

	色彩語(出現頻度)	種類数(a)	JIS数(b)	a/b
R	紅(111)桜(105)赤(55)桃(51)…	8	23	34.8
O			25	0.0
Y	黄(27)	1	17	5.9
YG			12	0.0
G	緑(18)	1	9	11.1
BG			5	0.0
B	青(110)空色(1)瑠璃(2)紺(1)	4	22	18.2
V			8	0.0
P	紫(17)	1	7	14.3
RP			2	0.0
N	白(139)黒(49)灰(4)	3	15	20.0
その他	金(4)銀(3)色(2)…	5	—	
計		23	145	

表7 対象の識別に用いられている色彩語

色彩語と使用頻度
白(37) 赤(30) 青(22) 黒(19) 黄(18)
銀(13) 金(12) 紅(10) 紫(6) 桃(3) 緋(1)
組合せ上位
赤－青(9) 金－銀(7) 白－青(6) 白－黄(6)
白－赤(5) 白－紅(3) 白－黒(3)

3.4.3 識別のための色彩語

白百合・紅百合・黒百合、あるいは黄水仙・桃色水仙のように、同一あるいは類似の対象物をそのもつ色によって識別・表現する例も多い。表7に、そうした識別に用いられた色彩語をまとめた。使用色彩語としては白、赤、青などが多い。また、組合せとしては赤紫蘇・青紫蘇などの赤－青、金木犀・銀木犀などの金－銀などが多い。この識別に用いられている色彩語は、10語程度に留まるとみられる。

なお、根源色カテゴリのうち、緑のみはこれに含まれていない。

3.5 出現頻度からみた基本色彩語

Berlin & Kay (1969)、Kay & McDaniel (1978)¹³⁾の基本色彩語理論から、季語における色彩語を整理すると図3のようになる。特徴的な点は、次のとおりである。

出現頻度では①根源色カテゴリに相当する色彩語が多用される。②そのうち、blue・red・whiteは多いが、greenは少ない。③派生色カテゴリのうちではpink・purple・brownは多いが、orange・grayは少ない。④redが赤と紅に分化している。⑤pinkには桜があてられる。

しかし、色を直接指示するという狭義の色彩語(3.4.1 参照)に限定すると、次のようにまとめられる。①根源色カテゴリに属する色彩語は多い。②そのうちwhite・blueは多いが、green・yellowは相対的に少ない。③redは赤と紅に2分されるが、赤の方が多い。④派生色カテゴリに属する色彩語は少ない。⑤brown・orangeに属する色彩語は皆無である。⑥pinkは桃色より桜、greyは灰より鼠が優位である。

4. 考察

4.1 色彩語認定基準の問題

Berlin & Kay (1969)は基本色彩語の基準として、使用頻度が高い、単一語彙素、色名であることが第一義、など9項目をあげた。本報では、JISの慣用色名をひとつの拠りどころとしたけれども、季語を含めて日本の伝統では、たとえば「朱色」ではなく「朱」のみで色を指示するように、「色」を除いた表現がかなり定着している。しかし逆に、「色」を削除すると、単に対象物の名称になってしまうケースもある。したがって、色彩語とみなすか否かには、今後国語学や国文学による解釈、鑑賞的な視点もとり入れて、より厳密なあるいは意味のある区分を行うべきであろう。ただ、本論

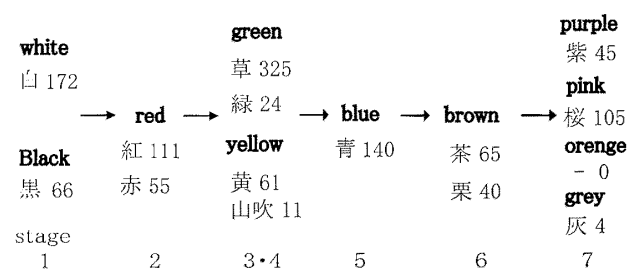
で扱った季語に、広義の色彩語あるいは色を強く連想させる語が12.7%と比較的多い事実は、伝統的な日本語におけるひとつの特徴とみなしてよい。対象のもつ形態、大きさ、材質その他の諸属性にくらべて、色をより優先的に抽象して言語化する傾向、さらにそれを展開拡張して表現する傾向が、色を連想させる季語の増加をもたらしたと考えられる。

4.2 カテゴリと測色値との関係の問題

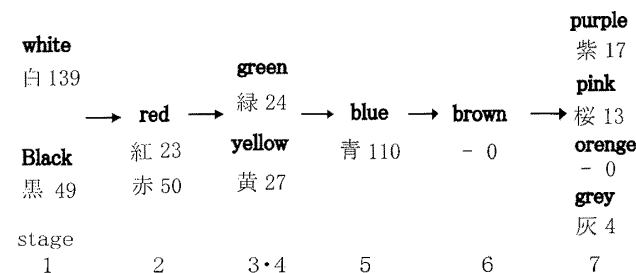
植物のgreenを青と呼ぶなどのgrueの存在は、次項で述べるようにカテゴリの問題として説明される。しかし、植物の葉色を測色すれば、ほとんどがマンセル色相のGYに属する。したがって、葉色が青と呼ばれるまでには、知覚された色相GYが、記憶色などの効果も介在して色相Gとなり、さらに色相Bを含むカテゴリに統合されるという過程が想定される。

今回得られた色彩語をトーンによって分類した結果では、vv(あざやかな)に該当する色彩語が高率を示した。しかし、赤蛙、赤梨、赤潮の測色値がvvトーンであるはずはない。これらの赤は、あくまでも色味の傾向を指示しているにすぎない。

こうした意味でも、日常的あるいは文学的な色彩の表現に測色的な視点を極度に適用する姿勢は危険であり、むしろ言語あるいは文学からの解釈を加味するこ



A 色彩語総数 (N 1224)



B 色を直接指示する色彩語 (N 441)

図3 Barlin & Kay (1969)のモデルからみた季語に含まれる色彩語 (数字は出現頻度)

とによって、理解がより深められよう。本報は、そのためのひとつの手がかりに留まる。

4.3 基本色彩語からみた特徴

(1) grue

既に述べたように、greenとblueとを合せて「青」と称するいわゆるgrueは、季語においては強固に認められる。特に、植物はもっぱら青で表現され、緑で表す例は少ない。

植物に関する表現としては、青の他に、若葉・松葉などJISでYG系に分類される色彩語がある程度認められた。この事実からは、greenに相当する青と、黄みを強く感じるGY系色名とが使い分けられているのではないかと推測される。

また、これに関連して、B系に分類される色彩語に種類が多い点にも注目すべきであろう。藍・瑠璃・蒼・紺などは、青がgreenを含むところから、blueをよりの確に指示するために語彙が分化してきたとも考えられる。

(2) red, pink, grey, brown, orange

基本色カテゴリでみた場合、紅はred、桜はpinkに相当する基本語彙とみられる。使用頻度はこれらに比べて少ないけれども、greyに相当する語は灰ではなく鼠のほうが多い。

brownに相当するとみられる茶は、それなりの頻度で使用されている。しかし、その主流は茶摘・茶の葉選り・茶もみなど茶の育成・製茶、聞茶・御福茶など喫茶にかかわるものである。色を表現したとみられるのは茶羽織など極めて少ない。したがって、季語に用いられている茶は、色彩語とは認め難い。さらに、brown系の伝統的な色名である、褐・褐色も用いられていない。したがって、季語にはbrownは存在していない、あるいは例外的であると考えられる¹⁴⁾。

同様の例は、O系にもみられる。橙飾る・回青橙など、これらは植物の“実”の橙を示している。オレンジスカッシュやサマーオレンジなど明治以後の外来語も季語のうちに含まれているけれども、色を直接指示するとはみなし難い。

なお、茶・桃・橙・灰はいずれも本来物質名であり、これらを基本色彩語に加えることは、Berlin & Kayが自ら設定した基本色彩語基準に矛盾するとの指摘はしばしばなされる¹⁵⁾。

(3) 季語にみる基本色彩語

以上から、季語のうち色を直接指示している語に限定して、基本色彩語理論にあてはめると次のようにな

る。

まず、根源色カテゴリは季語においても確認できる。ただし、このうちで上位のredは赤と紅に分化する。

緑は、頻度が低い点、緑の羽根・緑の週間など新しく季語に取り入れられたとみられる例が多い点、対象物の識別の手段としても用いられていない点などから、伝統的な基本語とするには疑義がめぐえない。

派生色カテゴリにあたる語は、色を指示するという基準からみると頻度は著しく低い。特にbrownとorangeとは出現しない。そして、pinkは桜、greyは鼠の用例が多い。

以上から、季語における色彩語は、基本色彩語の視点から次のように要約できる。頻度からみて、第1水準は白と青、第2水準は黒と紅（または赤）であろう。これは、佐竹の指摘した明暗顕漠に対応する。次に、第3水準は黄・緑・桜であり、これに第4水準として紫と鼠とを加え得るかも知れない。しかし、このうち少なくとも桜と鼠とは物に由来しており、厳密な基準を適用すれば、基本色彩語の要件を満たさないことになる。とすれば、第1水準および第2水準に桜を除く第3水準を加えた6カテゴリは基本色彩語理論の根源色カテゴリと一致する。さらに、残る第4水準の紫が、季語あるいは伝統的な日本語における特異な色といえる。

なお、白と黒との用法からは、light - warm, dark - coolを見出すことはできなかった。

おわりに

季語のうち、12.7%が広義の色彩語を含んでおり、種類数では90語が得られた。しかし、色を直接指示する語に限れば約0.3%、20語に留まる。これは、前田が古代における色彩語彙について指摘した「丹・赭・黄・緑・青・翠・白・黒のみ」という傾向に近い。

この大きな乖離に、文学的な鑑賞や解釈があずかって、「色彩感覚豊かな表現」となるのであろう。

本論は、小松史枝・近江源太郎：季語における色彩語の用法 第36回日本色彩学会全国大会（日本色彩学会誌vol.29 38 - 39 2005）を基に構成した。

なお、本論文を作成するにあたり、女子美術大学大学院講師である電気通信大学の小林光夫教授にご助言を賜りました。感謝の意を表します。

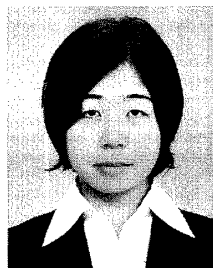
参考文献

- 1) 佐竹昭廣：古代日本語に於ける色名の性格, 国語国文 24, 1-16 (1955)
- 2) 前田千寸：日本色彩文化史, 岩波書店(1983)
- 3) 伊原昭：万葉の色ーその背景をさぐるー, 笠間書院(1990)
古典文学における色彩, 笠間書院(1964)
日本文学色彩用語集成ー中世, 中古, 上代一, 上代二ー, 笠間書院(1975-1986)
- 4) JIS Z 8102-2004：物体色の色名
- 5) 波多野完治：文章心理学入門, 小学館(1989)
- 6) 木村俊夫：文学と色彩 富永(編) 芸術と色彩, 修道社119-129(1958)
- 7) コバヤシヒデオ：詩人の感覚 宮城音弥(編) 言葉の心理139-147, 河出書房(1955)
- 8) 安本美典：文章心理学入門, 誠信書房(1963)
文章心理学の新領域, 誠信書房(1960)
- 9) 新村出：広辞苑, 岩波書店(1984)
- 10) Berlin. B and Kay. P : Basic Color Terms, University of California Press (1969)
- 11) 水原秋桜子, 加藤楸邨, 山本健吉：カラー図説 日本大歳時記, 講談社(1983)
- 12) 福田邦夫：色の名前事典, 主婦の友社(2001)
福田邦夫：日本の伝統色ー色の小辞典, 読売新聞社(1987)
日本色彩研究所：色名事典, 日本色研事業(1973)
吉岡幸雄：日本の色辞典, 紫紅社(2000)
- 13) Kay.P and McDaniel.C.K : The linguistics significance of the meanings of basic color terms, Language 3.54, 610-646(1978)
- 14) Quinn P.C Rosano J L Wooten B P : Evidence that brown is not an elemental color , perception and psychophysics 43, 156-164 (1988)
- 15) たとえば, 長野泰彦：色彩分類 合田濤(編) 現代の文化人類学, 至文堂, 107-136 (1982)

(投稿受付日：2006年10月5日)

(掲載決定日：2007年4月20日)

著者紹介



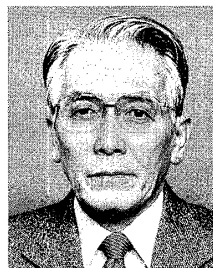
こまつみえ
小松史枝

1982年5月13日生

2006年女子美術大学大学院美術研究科芸術文化専攻色彩学修了

所属学会 日本色彩学会

現在、JA信州諏訪勤務



おうみげんたろう
近江源太郎

1940年6月29日生

早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻修了

所属学会 日本色彩学会、日本心理学会、感性教育学会 他

現在、女子美術大学大学院教授、財団法人日本色彩研究所理事長

付表1 色彩語を含む季語の色相別分布 数字%

	季節別					部類別							頻度計
	春	夏	秋	冬	新年	時候	天文	地理	生活	行事	動物	植物	
R	24.7	11.0	23.7	14.9	13.2	20.0	11.5	2.5	12.0	13.3	19.4	21.4	395
O	6.0	4.2	17.2	8.2	26.4	0.0	1.9	0.0	18.0	6.0	2.0	8.5	184
Y	9.5	4.0	4.5	5.6	1.9	10.0	13.5	8.6	5.4	0.6	7.4	5.3	123
YG	16.2	22.2	18.4	8.2	0.0	6.7	3.8	4.9	12.3	6.0	11.4	24.8	394
G	2.5	1.6	0.4	0.5	0.0	6.7	1.9	0.0	0.0	3.0	0.0	1.5	31
BG	0.2	0.6	0.2	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.3	0.5	8
B	8.6	29.4	10.1	16.4	13.2	23.3	17.3	67.9	28.3	20.5	19.1	10.9	393
V	6.2	0.6	1.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	3.6	46
P	4.1	6.7	2.2	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	12.7	1.0	5.5	95
RP	1.8	0.7	0.6	2.6	0.0	0.0	1.9	0.0	1.7	1.2	0.0	1.2	24
N	10.9	9.4	8.7	23.1	37.7	16.7	17.3	0.0	13.7	21.7	24.1	6.8	252
その他	9.3	9.7	13.0	17.9	7.5	16.7	30.8	16.0	5.1	14.5	15.4	9.9	242
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	2186

付表2 色彩語を含む季語のトーン別分布 数字%

	季節別					部類別							頻度計
	春	夏	秋	冬	新年	時候	天文	地理	生活	行事	動物	植物	
vv	24.3	28.7	26.5	25.1	13.2	23.3	19.2	17.3	15.4	27.7	27.4	30.0	576
lt	4.6	2.0	2.0	3.1	0.0	6.7	1.9	0.0	2.3	3.6	0.3	3.4	59
st	0.5	0.3	8.7	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	0.0	4.1	51
dp	1.8	1.0	2.0	1.5	3.8	0.0	9.6	0.0	0.3	0.0	4.0	1.3	34
pl	3.4	16.6	6.1	6.2	7.5	16.7	3.8	53.1	23.4	13.3	8.7	2.5	210
sf	5.6	4.6	4.0	1.0	1.9	0.0	0.0	0.0	1.4	4.8	1.3	6.5	95
dl	18.2	21.0	19.2	9.2	3.8	6.7	7.7	9.9	15.4	7.8	11.4	23.8	402
dk	0.9	1.8	1.0	4.6	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.6	2.0	1.7	35
vp	14.8	1.5	0.4	3.1	0.0	10.0	1.9	0.0	3.4	0.6	2.7	6.6	105
lg	0.5	0.8	0.0	0.5	0.0	3.3	5.8	3.7	0.3	0.0	0.7	0.1	11
mg	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	1
dg	4.9	2.0	8.3	4.1	18.9	0.0	1.9	0.0	16.6	4.8	1.7	2.7	105
vd	0.2	0.6	0.2	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.3	0.5	8
N	10.9	9.2	8.7	22.1	43.4	16.7	17.3	0.0	13.7	21.7	24.1	6.8	252
その他	9.3	9.7	13.0	17.9	7.5	16.7	30.8	16.0	5.1	14.5	15.4	9.9	242
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	2186